

仏教文学の本質

深 浦 正 文

小 引

仏教文学なる名称は、今日一般に用いられ、誰しも口にするところであるが、そういう学的部門が果して存在し得るかどうか？存在し得るならば、その所以を明かにし、論拠を確かならしめる必要がある、存在し得ないならば、そういう名称を用いること自体が穩当を缺いているのだから、学的用語としては避けるのが至当のように思われる。私は、かなり以前からこのことに関心を有し、世の識者といわれる人たちさえ、無造作にこの名称を使っているのをどうかと思つたことがある。で、自身もそのことを明確にする必要から、みずからの著書の中にも、それに関して多少触れたことがあり、さらに突つ込んでその検討を試みたいと思つていた。しかし、その後、人事多忙、殊に自身の研究をそれとは全然別個の方に専注せねばならぬ必要に迫られてからというもの、この事柄にかがつろうことが出来ずして過して来たのである。ところが、最近本学において、たまたまこの課題で講義するよう依頼されたので、それを好機に重ねてこの問題を検討し、特に学的立場よりその本質を明かにし

ようと努めた。この一篇は、その講義の一端を骨子として、さらに一段の潤飾附加をなせるもので、よつて以て、大方諸賢の示教を仰ぎたいと思うのである。

一

そもそも、仏教文学なる名称が、ただ漠然仏教文献を指す代名として呼ばれて来たのは、随分以前からのことであるが、それが嚴密に学的領域の部門として云々せねばならぬようにいわれたしたのは、まだ極めて最近のことに属する。随つて、目下のところ、それは実際において学としての独立をなして、ただわずかに、そうした方面に関心を有つ極めて少数の学者によつてのみ提唱され考究されているという状態に止まつていて、いまだこの名称に対する確固たる定義すら樹立されておらぬという有様なのである。そこで、あるものはこれを以て、

一、仏教關係の諸般の事項、すなわち、仏教の歴史・風俗・習慣・儀礼等を文学的に取り扱つた作品、

として解し、また、あるものはこれを以て、

二、仏教教理の美的文献、すなわち、仏教思想そのものを文学的に表現せる記録、

として解し、さらに、あるものはこれを以て、

三、仏教教徒の記述せる詩歌・文章その他の作品、

として解するといつたような工合で、その他、なお教えれば、幾らかの事項が挙げられ、その解釈するところ、実に区々まちまちである。

私の寡聞なる記憶を以てして、仏教文学なる名称によつて這般の關係事項をとにかくにも云々された最初の人は、故前田慧雲博士などではないかと思う。博士の著書で明治四十一年の刊行にかかる「仏教要義と文学」と題するものがあつて、小冊子ではあるが、そこに仏教經典の表現が一個の文学であるとして、その所以を叙述し、そして、それに仏教文学なる名称を附して呼んでいられるのである。これは当時としては、甚だ斬新ないい方の方であつたらし

いが、しかしそれは、畢竟上に挙げた三つの場合の第二に該当するに止まるもので、無論これを一個の学として論述していられるのでもなければ、またそれが組織的機構を具えたものにもなつていないのである。その後、大正十四年に至つて、故小野玄妙博士によつて「仏教文学概論」なる膨大な著書が公にされ、さらに昭和七年には、故山辺習学氏によつて「仏教文学」なるこれも相当の容積の冊子を公にされ、仏教文学なる名称が、ここに著書の題名にまで現われるようになった。併しながら、小野博士のは、これも先の三つの場合の第二に類似し、殊にその範圍を広げて、仏教文献の集成たる一切經全体を文学と見ようとなえていられるので、無論仏教文学の学的取扱いを逸脱せるものといわねばならぬ。また、山辺氏のは、同氏はさすがに文学的識才に富んでいられたこととて、經典中の文学的素質の豊かなものを採り上げて、幾分組織体系をつけるべく努めていられるので、その点、大いにこれを多として推称するに値するのである。しかし、それも多きは、經典の文学的鑑賞の豊かな箇處を羅列するに止まるので、学的機構の

線に十分沿つたものであるかどうかといへば、遺憾ながら甚だ物足りないように思われる。尤も、同書は「仏教思想大系」てう叢書中の一部に收められていて、純然たる独立の単行図書でなかつたから、頁数の制約や時間の限定等に束縛されて、十分論及することが出来なかつたかも知れぬが、とにかく、いうところの仏教文学の何ものなるかの本質には、少しも触れていない恨みがあるのである。

この小野氏より少し後の、昭和の初頃だつたかと思うが、江部鴨村氏が「仏教講座」なる講義録の一部に「仏教文学講座」というのを担当して、少しく掲載されたことがある。これは、その叙述の方針が、仏教文学の実際運動に關係する事柄であつて、その学的研究に關するものでないと、同氏は最初に断つていられるが、それにしても、仏教文学の何ものなるかの意義を明かにしようと試みていられる様子が窺われ、大いに期待されたのである。しかし、惜しいことには、該「講座」が中途で廢刊になつたものか、私の知つているところでは、同氏のは僅か二回の十數頁で止んだので、その論旨を十分聞けずじまいになつてゐる。

その後、同氏が何らかの形で公にされたかどうか？ 寡聞にしてその消息を知ることが出来ないのである。

江部氏のが出た少し後であつたと思うが、京都で「仏教文学」なる名称の雑誌が刊行されたことがあつて、その際同誌の当事者は、その誌上で、いわゆる仏教文学なる名称の意義について、広く識者の意見を質したのである。これは、畢竟、雑誌は刊行されても、その名称の意義が確定しておらぬために、こうした態度に出でざるを得なかつたのであつて、これを以ても解るように、それほど斯学の領域はまだ未耕の分野に屬して、以て今日に來つてゐるといふわけである。

二

そもそも、仏教文学なる名称の意義を明かにするに當つて、吾々の採るべき方法は、いずれの点にあるかというに、いわゆる仏教文学が、一般文学と如何なる点において區別されるべきであるかとの、区別の標準を明かにするところにある。これが明かにされたならば、仏教文学の性格は瞭然として会得されることであらう。しかるに、これが區別

は、一見甚だ容易のように思われるが、實際事に当れば、必ずしもそう手軽に果されるものではない。何となれば、普通に一般文学のように見なされておるものにして、その実仏教文学の中に入れねばならぬような内容を有つ作品があるかと思えば、反対に、当然仏教文学のように見なされておるものにして、その実一般文学の中に入れる方が妥当と思われる内容の作品もあるというわけで、甚だその始末に困るのである。

具体的にいうなら、例えば、わが国文学書中「方丈記」や「徒然草」の如きは、一般に普通の文学として取り扱われているが、おもむろにその内容に尋ね入れば、立派な仏教文学として鑑賞されると思われるのである。何となれば「方丈記」は、著者鴨長明の眼に映じたままの人生の現実や、従つてそれより感起された宗教情操を、文学的手法で表現せる作品であり、「徒然草」は、人生は無常なれば、そうした中にある吾々の生を意義あらしむべく、出離解脱の喜びを味識しつゝ、清く美わしき生を営むべきことを、著者兼好の実感より叙述せる文学的作品であるから、いず

れも、その思想内容は、明かに仏教文学としての性質を具えているからである。そうかと思えば、一方で、仏教經典中の「百喻經」の如きは、優秀なる寓話を湛えた仏教文学なるかの如く古來見なされているのであるが、その実、これは寓話に附せる註解的文字によつて、始めて仏教的意義を認められるもので、すなわち、こは、大乘諸經中より善惡罪福・応報についての譬喩百句を抄出して成れるまま、それがかの註解的文字によつてよく掬されるのであつて、もしそれを除けば、むしろ一般文学書と見做した方が當を得ているように思われるのである。

かかる次第であるから、仏教文学と一般文学とを區別するには、如何なる事柄を標準とすべきであるか、必定その區別の標準を確立してかからねばならぬわけとなるのである。

三

これについては、江部氏も既にかの「講座」の中に言及していられるのであつて、至極肯綮に値いする意見のように思われる。で、私もそれに従つて叙述を進めるならば、

まず第一に考えられるのは、作品の作者を以て標準とする態度である。すなわち、作者が仏教信者なるか否かによつて、その作品が仏教文学といえるかどうかを区別する標準としようとするのである。こは、一見その区別の標準が、さも明確に立てられるように思われるが、かかる態度が決して當を得ていないことは、多くいうまでもないところである。もしかかる態度が認容されるならば、仏教信者の作品の悉くは、必ず仏教文学といわれ、仏教信者にあらざるものの作品の悉くは、仏教文学といわれずして、一般文学たらねばならぬことになるであらう。尤も、作者の心理的傾向より見て、仏教信者にあつては、主として仏教文学的作品の創作に就くが自然であり、仏教信者にあらざるものは、仏教文学ならざる一般作品の創作に當るが自然といひ得られるであらうが、さればとて、しかくきつばりと区別することがどうして出来ようぞ。

そこで、その方法が不可とすれば、第二に考えられるのは、作品そのものの取材を以て標準とする態度である。すなわち、作品に取り扱われておる材料が、仏教關係のもの

であるか否かによつて、その作品が仏教文学といえるかどうかを区別する標準としようとするのである。この態度は、先の作者の如何によつて区別の標準を定めようとするものよりも、さらに容易な方法のように思われる。何となれば、作品の取材が仏教關係のものなりや否やは、その作品に示されているところであるから、作者の仏教信者か否かを認知するよりも、一層明瞭であるからである。しかしながら、かかる態度も決して當を得ていないことは、作品を一見してただちに會得されるところで、もしこの方法が容れられるならば、仏とか菩薩とか僧とか寺塔とかを材料とせる作品は、作品そのものの内的意向の如何にかかわらず、悉皆仏教文学と見なされるとの如き不自然さを招致されるであらう。豈然らんやである。

四

すでに、作者による区別も、取材による区別も、仏教文学と一般文学とを分つ標準となし難いとすれば、吾々は、如何なる標準を以てこの両者を取扱つてよいだらうか？

惟うに、これについては、どうしても上の如き形式的区

別を以て標準とせず、内容的性質によつて區別せねばならぬだろう。具体的にいえば、作品のモチーフ、すなわち、作品に盛られている思想的基盤をよく吟味して、それが果して仏教文学と見做すにふさわしき性質のものであるかどうかによつて、これを一般文学と區別するのほかはなからう。ただし、こうした作品の内的意向を吟味するについては、まず以ていうところの仏教文学なる名称に含まれている概念の如何なるものなるかを調査してかかる必要がある。

およそ、仏教文学なる名称は、仏教と文学との二種の概念より成り立つてゐるということ、いうまでもない。従つて、その有つてゐる文化価値たるや、当然、仏教としての宗教的価値と、文学としての芸術的価値とを併せ湛えてゐるものでなければならぬ。その仏教としての宗教的価値とは、それが如何なる余他の文学とも全然異つた特異性を有するものたることを意味してゐるので、仏教の教理・思想・主義・信条といつたような、要するに仏教たる聖的精神が十分に吹き込まれておらねばならない。従つて、これに接するものをして、宗教としての至純なる信仰皈依の念

を惹き起させるものたるを要するのである。また、その文学としての芸術的価値とは、一般にいうところの文学的性質のものたることを指しているので、文学の本質・形態・色調・特色といつたような、要するに文学たる美的素質が十分に具備されておらねばならない。従つて、これに接するものをして、芸術としての豊潤なる情操情味の熱を湧き立たせるものたるを要するのである。それゆゑ、如何に仏教の精神を内容とするものであつても、もしそれに文学の情味が缺けてゐるものなら、これを指して仏教文学と呼ぶことが出来ないわけであり、同様に、如何に文学の情味の優秀なる作品であろうとも、もしそれに仏教の精神が湛えられておらぬものなら、同じく仏教文学と称することが出来ないのである。畢竟、仏教と文学との両面の価値を併せ有つてゐるものにして、始めて仏教文学の名称を与えて然るべきこととなるのである。

五

こうした両面の価値を併せ有せる作品は、印度以来その数少なからず、殊に、仏教経典の中には、そうした性質の

ものを多数指摘することが出来る。またわが国文学の中にも、かなりそれに恰当するものを認められるのである。そこで、そういう作品の一々を抽出して、それが果して、如上仏教文学と認めて然るべき性質を湛えておるかどうかを検討し、さらに、それがよく文学として鑑賞され得るや否やの所以を明かにし、以て、そうした態度の組織づけが、これらの作品の総てに亘つて一貫せることが認められた時、そこに、始めて仏教文学としての学的部門が認められるわけである。すなわち、仏教文学が成立する次第である。

ただし、かかる態度において吾人の注意を要するところは、いわゆる批判と鑑賞との両者についてである。およそ、文学・芸術の特徴たる、他の科学一般と異つて、単にその事柄の理解のみに止まらず、鑑賞てう特殊の態度に出るを必要とするところにある。鑑賞とは鑑識賞美の謂で、美的対象に向つて情的側面より眺めるの態度を指し、畢竟その対象——それは芸術的のものでなければならぬが——をしみじみと愛で味うことである。こうした鑑賞の態度を取ることによつて、文学・芸術は、始めてその本来の意義に叶

うこととなるのである。しかし、それがすでに学としての成立を期せられる以上、それはまた、当然理解され批判されねばならぬわけでもある。況んや、仏教文学などといえは、それを宗教として信受し、文学として鑑賞する上に、さらに学として研究する必要があるのである。まことに、複雑多岐に亘る困難なる態度が要請されるといわねばならぬ。

果して、しかく困難なる態度が果遂され得るや、如何？ おそらく、何人も疑惧の念を抱かざるを得ないであろう。しかしながら、そうした事柄とて、もし幸にしてその方法に宜しきを得れば、たとい表面至難のわざと思われれるとも、必ずしも不能の沙汰ではないと信ずる。例えば、イギリスの美術批評家ジョン・ラスキン (John Ruskin) が一代の名著「近代画家論」(Modern Painters) に試みた詩情趣味豊かにして、しかも整然たる論理を以て始終せる研究態度の如き、また、わが藤岡東圃博士が、国文学史研究の上に、精緻なる考証を以て客観批評を加えつつ、しかも一面豊潤なる美的情趣を心ゆくまで恣にせる態度の如きに見るも、その成果の決して期待されざるにあらざる旨を会

得されよう。況んや、その取り扱う材料が宗教的作品たるにおいて、それに一段の感激の信受の念を繋げ得ることは、実に疑いなきところといわねばぬ。要は、事に当るものの心構えの如何にあり、方途の適否に懸つていと信する。吾人は真摯なる学究の徒の、必ずや這面に専心精進して、未耕の分野を開拓することの、一日も早からんことを切に期待して止まないのである。

六

なお、ここに、ちよつと注意せねばならぬことがある。

かく仏教文学の学的樹立が可能なりとして、それが取扱う範囲・資料は如上かなり広汎なる分野に亘つているのであるが、しかし、真に仏教文学として云為されるべき対象は、中に就いて特に仏教經典にあるべきだと思ふ。尠くとも、仏教經典に重点を置くべきだと思ふ。これは、仏教文学の性質として、もとより当然の次第であつて、国文学その他のものは、従位に置かれねばならぬのである。尤も、仏教經典といつても、經典全部に亘るのではもとよりのないで、その中のある部分、すなわち經部に就くべきである。何ゆゑ經部が、しかく豊富に文学的価値を湛えているかというに、それは、ひとえに、仏陀の指導方法の巧妙であつたのと、

ならびに、それが編纂者の表現手腕の優れていたことに起因するといえよう。編纂者の表現手腕の優れていたことは、翻譯者の訳出手腕の巧みさと相俟つて、その文学的価値を産み出す有力な原因をなしていることは、いうまでもないが、何というても、まず以て仏陀の指導方法の巧妙さがその根本原因をなしていることは、否まれぬのである。その仏陀の指導方法の巧妙だつたことは、すべての經典を通じて、隨時隨所、最も適当な説法をされている点より推しても、知ることが出来るのである。すでに、ブラーグ大学のウインテルニッツ (M. Winteritz) 教授も道破せる如く、仏陀は偉大なる宗教家であつたと共に、一面卓越せる教育家であつたのである。かかるわけであるから、經典中特に經部が最も豊富に文学的価値を湛えているわけであり従つて、まず以てこれに対して、その仏教文学としての考察を試みるが至当であると思われるのである。本稿、上に、仏教文学に関する先覺の著書を云々するに、いずれも仏教經典について叙説せるもののみを指摘し、その他のもの——それも多少は出されているが——を措いて問わなかつたのは、ひとえにかかる立場よりせるにほかならぬのである。

(終)